

講演

日時 平成29年6月6日(火) 16:00より
会場 ウェスティンナゴヤキャッスル2F「天守の間」

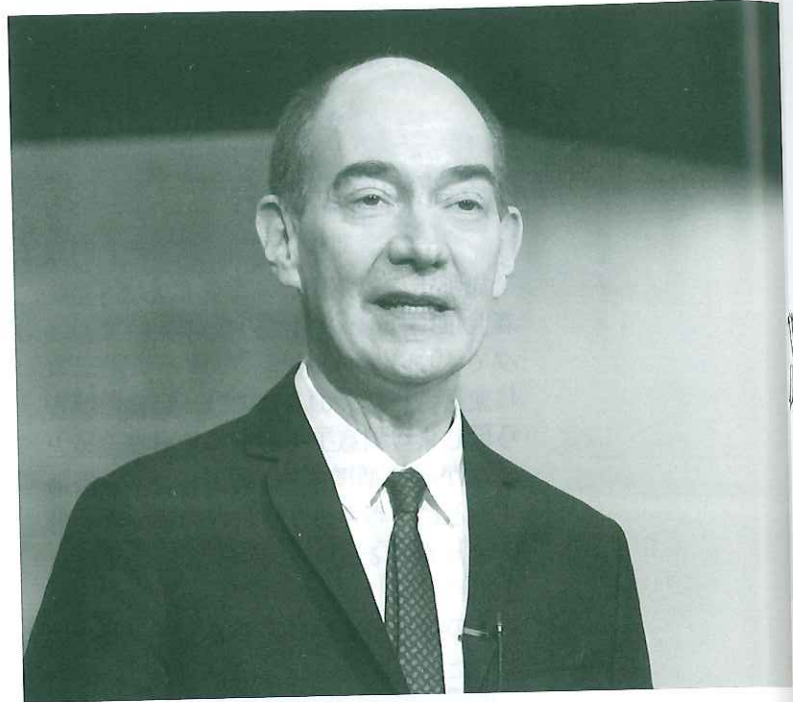
公益社団法人 名古屋西法人会
第2回通常総会 記念講演会

人と自然が織りなす 強くも美しい地域社会

～日本の歴史から現在、
そして未来に向けて～

日本文学研究者
国文学研究資料館長

ロバート キャンベル 氏



私は江戸時代・明治初期の文学が専門ですので、そこから日本の特異性、優位性を考えてみたいと思います。

奈良県の大神(おおみわ)神社は、日本書紀・古事記が書かれる前の日本列島の生活を証拠づけるようなものが出てくる古い神社です。

三輪山がご神体で、拝殿の奥にある鳥居から三輪山を仰ぎ見て祈りを捧げることが千五百年前から途絶えることなく繰り返されています。

入山するには社務所で手続きをして、いくつかの禁止事項に同意をしてから登ります。祈り、想いをご神体に馳せながら修行として山に入ります。

昔はそんな霊山が日本中にありました。富士山も崇拝の対象でしたから明治時代になって初めて女性が登れるようになりました。

広島県の厳島神社には弥山(みせん)という素晴らしい原始林の山があります。

文学には、波瀾万丈な人間の営みが書かれていますが、日本

の場合、自然現象つまり雷が落ちたり波が荒れたりをなぞらえて、人の気持ちを表現することが多いと感じます。

九州に広田淡窓(たんそう)という優れた文学者がいます。

江戸時代の身分社会制度のなかで初めて、百姓も侍も能力主義の全寮制の漢学塾「桂林荘」を作った人です。

彼は学生たちと同じ屋根の下で暮らし、この漢学塾に集まってきた生徒たちを叱るとき、声を荒らげるのではなく漢詩で示しました。

「君は川流を汲め、我は薪を拾わん」

輪番で朝ごはんを作るのですが、共同作業を重ねることによって仲良くなる。力を合わせて生きていくことを繰り返すことによって絆が強くなり、苦勞が楽しみになるという人生訓です。

福井県に橘曙覧(あけみ)という歌人がいますが、彼の和歌を読みます





と、江戸時代、いかに自然を心の糧にしているかがわかります。

「湯煙 今日のみ たてておけ」
「明日の薪は明日採りてこむ」

有限の材料を無駄にしない、大切にするという思想です。

彼の歌を編纂した『独楽吟』には、一日ぶらぶら歩いて、疲れたと思ったとき「泊まっていてください」と言われたら嬉しいという歌があります。

また、その中には「たのしみは朝起きいでて昨日まで無か

りし花の咲ける見るとき」という一首があり、今上天皇皇后が1990年にアメリカを訪問したとき、ビル・クリントン大統領が歓迎のあいさつの中で引用しました。朝起きて、咲いている花を見つけた驚きと喜びを素直に表現しています。

20世紀は戦争があり悲惨な時代ですが、日米の戦後の歩みを振り返っての想いがあったと思います。

弾力性に富んだ日本文化、自然を守りながら人の営みを続ける文化的な力、それは日本が誇るべき文化資本です。

2020年東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。それまでに日本政府や自治体が、日本の文化を振興させ、レガシーとして強くしていけるように願っています。そのためには、私は昔の人の小さな気づきが、日本の魅力を表すのにとっても有効だと考えています。

※この記事は平成29年6月6日(火)の講演の要約です。

文責/公益社団法人名古屋西法人会

